慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イ・ ロクシン著 ソヴェト工業書刊行会訳 ソヴェト工業発展史
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.11 (1954. 11) ,p.1069(73)- 1070(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19541101-0073
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19541101-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

出されて取引に附加され、利子率はi_3に上昇する。更に所得水準がY_4に迄高まると資産部分の最後の貨幣が C 丈引出され、取引分野に附加され、利子率はいまやi_4に高まる。尙一層所得が增加して所得水準がY_5となつたとすればどうなるか。最早資産部分の貨幣を利用する事は出來ない。そこでヨリ增加せる取引量の財貨の交換を行ふに必要な支拂は、一定量の貨幣をヨリ集約的に、卽ちヨリ高い流通速度で利用することによつてのみ行ひ得る。そして一定量の貨幣のヨリ集約的な利用はヨリ高い利子率を提供する事によつて可能ならしめられる。かくして遊休貨幣を取引分野に取り入れる事が出來なくなると、利子率は取引需要函數が利子彈力的となる範圍に押し上げられる。卽ち、所得水準がY_5に迄高まれば、利子率はi_5に迄引上げられる。

以上が貨幣の取引需要函數が利子彈力的であるといふことに對するハンセンの說明の概要である。この說明に就て考えてみるに、資産分野に於て流動性選好函數が、所得水準が次第に上昇しつつあるにも拘らず、一定として取扱われている事は問題となる。況や所得水準が變動しつつある際に於て、貨幣供給量一定という假定の上に立つているのであるから尙更問題となる。すなおに解釋する限り、資産部分に於て流動性選好の減退が期待されるべきであろう（註）。ともあれハンセンの說明は貨幣の集約的な利用と利子率との關係を指摘するに過ぎないのであつて、この事丈ならば、何も今更改めて行々しい說明を加える迄もなく、現實的、經驗的に充分認められる事である。

（註）ハンセンはこの點に關して、次の如く述べてゐる。「所得の增加が、遊保資産として保有すべき貨幣に對する需要を減少せしめるかもしれない、ということはもちろんつねにあり得ることである。……しかしながら最初の所得增加は、投機業者を誘引して最も有利な瞬間に、在庫品や設備に實物投資を行う準備として多額の遊休現金を保有せしめるかもしれない、ということもまた眞實でありうるであらう。」〔原書六十九頁、譯書七十八——九頁〕

この樣な事情が考慮されるべきは勿論であるが、それにも拘らず、貨幣供給量一定という假定の下に論ずるかぎり、所得水準が漸次上昇をつゞけるうちに、やがては遊休貨幣の保有欲求は減退すべきであろう。

しかしながら、更に突込んで考へみると、ハンセンが圖式を援用して迄も說明を試みている背後には、總括的な貨幣理論の展開という意向が潛んでゐる樣に思われる。ケインズの流動性選好の理論についてみるに利子率の決定はM_2との關係において論ぜられ、一應M_1とは切離されている。ということは、利子率に關する理論は所得水準一定という前提の下に論ぜられていて、所得水準の變動との關連に於てM_1とM_2とが利子率に對して有する有機的な關係が明確に論ぜられていない事を意味する。もしハンセンの上述の取引需要函數と本來の流動性選好函數とを同時にとりあげた說明が、ケインズのこの樣な理論的缺陷を克服せんとする試であるならば完全な失敗であろう。何故ならば、利子率がi_4に至る迄は、利子率は一方的に流動性選好函數（ケインズのM_2と關係する）から決定され、取引需要函數ケインズのM_1と關係する）と利子率との關係を論ずる際には流動性選好函數とは全然無關係になつているのであり、ハンセンの說明は二つの函數を全く形式的にならべたに過ぎないからである。ケインズはM_1とは一應無關係にM_2との關係において流動性選好理論を展開したのであるが、他方ケインズの流動性選好理論を大いに評價しつつ、貨幣の取引需要函數すなわちM_1側の事情と利子率の關係を說明せんとするハンセンは流動性選好函數とは無關係に、すなわちM_2とは切離して、このことを爲したのである。

以上は本書のごく一部についての論評であるが、これにつづく所得理論の解明といひ、又財政政策に關する敍述といい、ケインズ理論の基礎の上に立つた簡潔な說明が試みられて居り、近代貨幣理論の理解にとつて有益な入門書であろう。

（安井　孝治）

イ・ロクシン著　ソヴェト工業書刊行會譯『ソヴェト工業發展史』

本書は一九四八年にモスクワ外國語出版所から發行されたものである。從來、ソ連工業についていくつかの著書が出版されたが、このように革命前から戰後迄の發展を一書に收めたものは少ない。

全卷を通じてソヴェト經濟制度の優秀性が强調され、今日の隆盛をもたらしたものは實にソヴェト制度の力であつたことが繰返して述べられている。ただこの本は一九四八年に出版されたため、「國家計畫が經濟法則の力をもつている」というような、スターリンが正に批判したヴォズネセンスキーの表現がでてくる。このことは譯者が周到に譯者註をつけて注意している。然しヴォズネセンスキーがすべてにまちがつているかのように、彼の引用文がでる毎に譯註をしているのは行きすぎであろう。引用されたヴォズネセンスキーの言葉の中に正しい部分もあるのである。

第一章は革命前のロシア工業が描かれ、第二章で革命によつて權力を握つたプロレタリアートがいかに新しい社會制度への前進に努力したかを强調している。しかしここで注意すべきは勞働者管理の絕大な權限、そこから生じた經營の混亂、これを統制し指導する政府機關の無能、それが過度になつたグラフキイズム（官僚主義）という一連の動向である。これを單に、ソ連公式の說ではあるが、外國干涉軍・國內革命軍のため不可避であつたとするのは安易すぎる。われわれの知りたいことは勞働者管理の混亂やグラフキイズムの行きすぎに目をつぶることではない。外國干涉や國內戰さえなかつたら戰時共產主義時代はなかつたとして、レーニンの計畫＝ネップこそ社會主義への正しい過程であると稱えることではない。ソヴェト體制がいかなる點でこの困難期を切り拔けるのにすぐれており、ネップへの到達を可能にしたかを示してほしい。これが明示されない限りいかに形容句を述べようとも、やはりネップは行きづまり打開策としてしか考えられなくなる。

第三章國民經濟復興期では、ネップによつて農・工は密接に結合し生產力は增大することが中心に書かれている。「わずか六月間に工業生產が戰前水準に達したこと」はソヴェト經濟體制の優秀性を示すものである。而もこの復興は自國の蓄積資源だけでやりとげられた。これがロクシンによるネップの功績である。勿論われわれはネップの功績を認めるに吝かではない。しかしまた幾つかの疑點もある。ネップを、戰爭さえなかつたら革命直後に行なわれる筈の政策であつたと考えるだけでよいであろうか。ネップの成功を裏づけたものに大きな犧牲がなかつたであろうか。さらにまた、ネップの本質は何であるのか。社會主義建設にあるのか、農民との妥協にあるのか、資本主義との妥協にあるのか。この本質をどれにするかによつて、ネップから計畫階への移行の時期とその後の社會主義への見方が異なつてくる。この點についてロクシンの答えは明らかではない。

第四章で一九二八——四〇年の三つの五ヵ年計畫が概說されている。この期間を問題別に論じたのが第五章である。まず生產高の統計について注意すべきは、工業生產・農業生產・勞働生產性・國民所得について一九二六—七年價格が用いられ、（ある財貨については一九三三年價格）、建設輸送費・商業取引・賃

金・豫算高は各年度の現在價格で表示されていることである。一九二六――七年價格は工業品が農產物に比して著しく高いことになつており、とりわけ工業建設費が高い。これを統計の不變價格とすることによつて計畫の達成を誇示できる。例えば一九二七年一〇〇とするソ連大工業の生產指數は三七年に公表では五五一となつているが三七年價格では三七一にすぎない。これはほんの一例であるが、こういうことを念頭におくことが必要である。次に勞働生產性についてロクシンは、一九三八年が一九一三年の三六九・六%になつたことを示しているが、われわれの知りたいことはむしろ、一九二八年から計畫期を通じてどれ程上昇したかである。

第七章では、大祖國戰爭を優秀な社會主義體制で勝ち拔いたソ同盟の復興が示される。第四次五ヵ年計畫は重工業と鐵道運輸の復興發展に優先權が與えられている。そしてこの計畫が着々と成就されたことは疑えない事實である。しかし新資本建設と復興資本建設の發展に並行する國民經濟全部門の急速な進步すなわち經濟全體のバランスある發展という課題は果してどうであろうか。鐵道運輸についてもなお問題があるし、消費財生產についてもマレンコフの方針が示す通り萬全ではないのである。ロクシンのようにソ同盟の發展をのみ誇示することは、かえつてその前進を阻むことになるかもしれない。

（A5、二〇八頁、二九〇圓、現代書房、昭和二九年四月刊）

（加藤　寛）

J、ネイマン『確率・統計學の第一步』

(J. Neyman, First Course In Probability And Statistics, 1950)

戰後統計への關心が高まると共に、それに關する多くの著書が出版された。邦文の文獻も數多くあるが概してページ數にとらわれるためか說明の簡單なのが多い、これに比して英米のものは例題も豐富であるし說明も詳く述べられている。それから同じ統計學の本といつても入門書から高度のものにいたるまで種々の段階にわたるわけで、この內最も利用され又要求されるのは入門書であるからこの種のものが最も多くの數をしめるのは當然である。そしてその入門書といわれるものでも一册一册を取り上げればそれぞれ特色がある。あるものは簡單に統計學全般にわたつて觀察する、あるものは實例によつて實際のやり方を說明してゆく、又あるものは實例よりも理論的問題を中心にしてゆく等である。ここで紹介するネイマンのファーストコースも入門書の一つである。即ち新制高等學校を卒業した者なら誰でも容易に讀むことができる。しかしその限度に於てできるかぎり嚴密正確がきされている。本書は題名のファーストコースが示すように、或はつづいてセカンドコースが出版される豫定でその前半をなすものであるかもしれないが、その內容は他の入門書とは少しく異つている。即ち本書の中心はネイマン流の統計學の考え方とその方法の根本をいちいち實例をあげながら詳しく述べることにある。從つて普通の入門書に述べてあるような所謂標本論や種々の標本分布、例えばよく知られているT分布χ^2分布F分布或は相關關係等については全然ふれていない。從つ本書一册によつて統計學全般を概觀するわけにはゆかないが、普通の入門書によつてそれらの技術的方法を知られた人がもう一度その考え方を一步進んで考えて見ようとする場合本書は絕好のものであり恐らく唯一のものではないかと思う。統計學とは何かということについては現在議論のある所であるが本書では一貫して「歸納的行爲」の規則を形成するものと

して述べられている。即ちどのような場合にはどのような行爲をすればよいかという選擇の規準を與えるものなのである。我々の日常生活に於ても、意識的に或は無意識的に歸納的行爲の規則を考えて行動している。又それは古い昔から行われてきたのである。人間の行爲の進み方は、「恒常性 permanencies」或はむしろ我々をとりまく對象、我々が現象として敍述するところのこれらの對象に於ける變化の兩者に恒常性を探る我々の能力に基礎を置いている。注目された最初の恒常性の一つは對象の、少くとも若干の對象の範圍をもつたであろう。かかる範圍は對象の性質として考えられるようになりまもなくそれらを測定する規則が發明された。より多くの實驗を重ねることによつて、嘗つては確實に建てられたと思われた恒常性が絕對的なものからはほど遠いものであることがわかつてきた。かくして多くの對象の範圍は時と共に變る。このことを注意することによつて人々はこれらの變化の過程に於ける恒常性を打ち建てる仕事にとりかかつた。多くの現象に於てある恒常性が全く安定的に現われる。このことは若干の觀察された事象に關して我々の行爲を規制する習慣を作る、これが我々が歸納的行爲と呼ぶものである。例えば人間の歷史の初期に於て、雨や嵐は黑雲の出現の後にやつてくるということが設立された。この恒常性は、（大部分の恒常性が絕對的でない如く）絕對的ではないけれども、人間そして又他の若干の動物は空に黑雲が現われる時いつでも身に覆ひをつけようとする、しばしばそれは常にそうではないけれども滿足すべき結果を導く。更に十七、十八世紀になると新しい恒常性がヨーロッパ大陸に於ける賭博者とイギリスに於ける Masons によつて探られた。新らしく探られた恒常性は何等かの一つの試みの結果が豫知できない所の事に於て繰返された試みに於ては特殊な結果が生ずるという、相對的頻度に關するものであつた。さいころを振る例がそれである。この恒常性或は性質はさいの大きさと重さが同じであるならば測定され變らない。イギリスの Masons は同樣な狀態に於て生活している同じ年令の人々の死に對する關係の同樣な發見をなした。これらの恒常性が一度注意されると對應する抽象的概念が容易につくられた。定式化された長期の相對的頻度は確率のレッテルをはられ我々の歸納的行爲をつくる上に有役な應用をつくつた。これが確率の計算、そして數理統計學の初めであつた。次いでネイマンは賭の例によつて述べているが普通のさいならば1の目がでる確率は$\frac{1}{6}$でありこれから二個のさいを24回振れば兩方共1の目が少くとも一回現われる確率は$\frac{1}{2}$よりわずか小さい。從つて1の目がでるという立場と出ないという立場を考えれば1の目がでないという方に賭ける方が長期を考えれば得になることは明かである。しかしある特定の賭博場なり特定のさいを考えればそれはゆがんでいるかもしれない。從つて賭をする前に何回か振るのを見ていて、何回か1の目がでればこれは1の目がでやすくつくられているのだと、考え、何回か1の目がでればこれは1の目がでにくく作られているのだと考え、それぞれの方へ賭をしなければならない。その場合の何回でればどのような行爲をすればよいか、その行爲の規準を求めることが統計學の問題となるわけである。より一般的な記號によれば、

$$E_1, E_2, \ldots\ldots, E_n, \ldots\ldots$$

がある現象に關連する實驗或は觀察のすべての可能な異つた結果であるとしよう。そして

$$a_1, a_2, \ldots\ldots, a_n, \ldots\ldots$$

はこれらの現象に結びついて考えられるすべての異つた行爲であるとしよう。もしも一つの規則Rが各々の可能な結果E_iに